

角田 春美選

幻桃164号より

もう僕にかかわらなくていいからと自分が見えている時の夫
鉄線の花びら虫にくわれたり虫食い穴からのぞく夏空
鴉が巢に運びそうだな暖かな陽を受けている路上のバレッタ
曲がり角いくつも曲がってここに居り木洩れ日のなか風に吹かるる
春でない夏でもなくていつなのかそんな些細なことを笑う雲
亡き母の岸の光をこの沢に灯して螢二つ漂う
目をあけて見えるものなど知れたもの浅い眠りに君の声を聴く
小さいガードレールだもんで水路もまあ小さいんだわ亀もおらせん
信号で並んだ男が連れてきた真夏の鬢付け油の香り
「甘いね」と枇杷の実ふみ笑みしひと白き項に夏日こぼれき
あぢさゐの色も褪せたり七月の渴けるのどに吉岐の塩あめ
にきびだと思つしやはりにきびだとおできをつまむ五十三歳
「そうだよね」その一言が風呂敷で包み込むごと解決される
篝火より鶴匠の頭を守りたる風折烏帽子に焦げし穴あり
捨てられぬが捨ててもいいと呆気なく心の中の何かが消える
植松 悦子
永長 淑子
諸井 敦子
岩崎勢津子
大平 千歳
鈴木 稔朗
田中 靖人
江口美由紀
柴田 秀子
棚橋 好江
藤田 正代
豊増 美晴
堀田 桂子
青木 鈴子
白井 洋

阿由知集

戦後八十年 長崎 岩崎勢津子

父は九人兄弟の次男坊生きていたなら今年百歳
末っ子の叔母は胎内被爆せり父との年の差二十歳なり
戦争から何年経ったか思うとき叔母の年齢確かめている
ヒバクシャの最年少なる叔母は今朝逝つてしまひぬ七十九歳
「ながさきピース文化祭2025短歌の祭典」対馬に行かん
対馬には最初で最後と白岳に登頂したのは五年前なり
白岳の山頂部から見晴るかす朝鮮半島うつすらとあり
「長崎つてピースとハートが好きなのね」笑い声する眼鏡橋そば
「興福寺」「龍馬通り」「眼鏡橋」道を聞かれる秋分の午後
思い切り煙に巻かれ秋刀魚焼かん真夏日続く十月朔日

六十ワットの電球の下 北九州 西城 燐子

砂袋のように重たきこの身なり「老残」という言葉が浮かぶ
三連休何をするのか茶を淹れて菓子器を前にどう過ごそうか
家族より母が静かに林檎むく六十ワットの電球の下
焼きりんごいくたび食べたことだろう父の焼きたる紅玉匂う

三連休の家居たのしき厨べにカレー作らむ玉葱三つ
玄關をひらけば晩夏の夕近し宅配便のすりごま届く
じりじりと陽に灼かれつつバスを待つ隠れ場所なき海拔二メートル
炎天下のもとに働く水道の本管取替工事作業人
くたぶれたわが曳くカートの紫色を見るときもなしに見て坂のぼる
極楽のあまり風ふく坂の上しとど汗かき上りてくれば

八月の日日 桑名 大平 千歳

流星を待ちつつ見上げる雲間より月覗きおり何を探すか
流星群観んとぞ夏の三角おぼろの月に一縷の望み
昼の月せつない程に透き通り空の青さが目に沁みとおる
日が落ちる寺町商店街の裏ちいさき影の走る優しさ
朝採りの真つ赤なトマトただけり真夏の暑さも有りがたきかな
手付かずの夏がまだある抽斗の昨年求めし向日葵の種
近付きて新聞受けに音の立ちばさりと夜が朝へと変わる
追う時間追われる時間重なりて異なる世界は内にあるらし
そそり立つガラスの壁は雲映し流れながれて 私はここよ
たとえれば梅がゆのようにシンプルで凜とした君は逝つてしまった

補聴器 紀北 高須 貴子

子や孫の会話に入らず疎外感聴こへの悪しき我が身悲しむ
安からぬ買い物ゆゑに長らくを思ひあぐねむ補聴器購入
幾度も聞き返へせずに解つたふり笑つて誤魔化す会話度々